■評論　Critique

イタリアの夏石番矢

―夏石番矢『空飛ぶ法王 160 俳句 Flying Pope 160 Haiku』(Allahabad – India, Cyberwit.net, 2021) を基に

Hideyuki DOI
土肥 秀行

はじめて「空飛ぶ法王」のシリーズにふれてから、もう随分になる。しかしどれだけ時が経とうと、二〇〇五年六月にフィレンツェ市が催した夏の詩祭「遥かな声、近しい声」での、夏石による「空飛ぶ法王」のリーディングは忘れられない。ディレクターの詩人エリーザ・ビアジーニと並んで身を置いた聴衆席では、あくまでシリアスな朗読とギャップある中味に、ときおりクスっと笑いがもれていた。フェスティバル自体は、聖フランチェスコにより初めてイタリア語（ラテン語でなく俗語）で書かれた詩文に倣った名を冠し、いたってオーソドックで真面目である。それでも、根っからシニカルなフィレンツェ人（＝イタリアの京都人）の感性に、「空飛ぶ法王」はマッチしたのだろう。

そもそもイタリアにおいてハイクは、フランス発の異国趣味に染まっていた二〇世紀初頭の前衛芸術家たちの関心を呼び、戦後にはネオアヴァンギャルド諸派（ザンゾットも含む）による実践をみた。それが一般にも知られるようになったのは、一九八〇年代以降、メジャーな出版社からいくつものアンソロジーが出されたことによる。まずリッツォーリ社から『苦と露』（古典詩歌中心）が出版される。そしてヴァッラルディ社では『新旧ハイク』が、前衛としての伊語ハイクを牽引したカルラ・ヴァジオらによって編まれた。そこに夏石番矢作品の翻訳も、オリジナルと共に収められる。出版活動と共に、イタリアでのハイクの普及に大きな役割を果たしたのが、子どもから大人まで広く一般を対象とした、様々なコンテストである。なかでも最大規模を誇ったのは、二〇二〇年に惜しくもその歴史を閉じたカッシーナ・マコンド協会の国際ハイクコンテストであった。伊語による五七五の三行詩に、キゴを含めるよう課す「宣言文」を掲げるコンテストである。その審査員には、夏石が、戦後最良のイタリア語詩人のひとりであるニーコ・オレンゴとともに名を連ねていた。オレンゴは、評判の連作「海からのポストカード」に、五行もしくは六行からなる短詩形を導入するほど、ハイクに親しんでいた。

このように、いまでは一定のレベルに達したイタリアでのハイクの普及に、要所要所で関わる夏石である。冒頭に引いた詩祭のあとには、夏石に感化された詩人ビアジーニが、京都で滞在制作活動に身を投じ、これまた数語からなる超短詩シリーズ「ウマミ」を残した。軽妙さは夏石ゆずりである。

ただ、われわれがフィレンツェで接した「空飛ぶ法王」は、いくらカルヴィーノ風の題材とはいえ、軽みに支配されているわけではない。エドワード・レビンソン評にあるように、「絶望、謙虚、ユーモア、そして普遍的な悲哀」と、様々な要素が見出せる。ここでわれわれは、最後にある「悲哀」をピエタと読み替えたい。というのも絶対的な愛情、もしくは共感（憐れみ）を作品に感じるからである。「空飛ぶ法王眉間のしわから麦の種」とあるように、重い感情に約束された小さな実りの「種」こそが、息の長いシリーズを導く核となるのである。

いまや夏石の「空飛ぶ法王」が、実際の存在と切り離されていることは、誰もが認めるところである。対して現実の法王は、ここ数年、数々の試練に晒されてきた。在任中に一二七カ国を訪問し、「空飛ぶ法王」の異名をとり、夏石の連作があやかることとなったヨハネ・パウロ二世は二代前、もはや過去の存在である（列聖済み）。続くベネディクトゥス一六世は、悪名高きバチカン銀行の頭取を馘首し、退位している。現在のフランシスコは、自ら率いる組織との対立に頭を悩ます。夏石の句がときに政治的なのは、宗教的指導者というより、むしろ一国の長である法王を意識しているからである。「飛ぶ法王飛ぶキリストについに遭わず」なのだった。

ここ数年のあいだのバチカンにおける歴史的な変化として、二〇一九年の来日を機に、公式には「教皇」の訳語を使用するとした布告が挙げられる。どちらかというと教科書用語に近かった「教皇」に名称統一されてしまい、夏石も修正（空飛ぶ教皇？）が強いられるかというと、その必要はないほどの耐性をすでに作品は培っていたのだった。

連作を貫く、いわゆるナンセンスさが、この耐性を支えている。非理性であると、結果的に帯びてしまうのが聖性である。主人公が法王だから神聖なのではない。実存在に発して、作品によって純化されていった法王は、ついには聖性を発するようになるのである。聖性の理解には、イタリアの詩人・映画監督であるパゾリーニが、日本の観客にむけた「ミカドを想像くだされば よいでしょう」とのアドバイスが有効であろう。パゾリーニの映画『テオレマ』の主人公である「客人」が、どこからともなくあらわれ全ての人に関わり、全ての人をかき乱すことを説明するために挙げた置き換えだった。「空飛ぶ法王」においては、空洞と化した存在に対し、作品だけがしかと存在する。その越えられない淵という関係にこそ、神聖さが宿る。「トイレの鏡に未来の私と空飛ぶ法王」は、顕示の瞬間を示す映画のシーンのようではないか。

シリーズの長い歴史において、伊語訳はすでに二度目である。かなり早い段階からなされていたイタリア語翻訳だが（初の公刊は二〇〇八年）、新たな訳者（前回は書道の達人、今回は日伊交流史の専門家）にスイッチして大きく変わったのは、固定されたシンタグム「空飛ぶ法王」が、Il Papa che vola から Il Papa volante と訳し直されたことである。かつては関係代名詞まで伴い散文的であったのが、動詞の現在分詞＝形容詞を代用することで、より詩的な効果を生んでいる。もちろんオリジナルは、「空飛ぶ・・」といえば円盤とする連想を誘っていたが、今回の訳は、語形の上でＵＦＯ（伊語では disco volante）と近くなっている。同時に不敬度も増すが、二代前の法王から年数が隔たり、ますます自立する夏石作品の抽象化により補われる。「ニューメキシコのＵＦＯ実は空飛ぶ法王」は、今回の伊訳においては volante の反復で韻を踏むことも可能なはずであった。新しい訳者は、もう一歩踏み込めたはずである。

たしかに、動詞の散文性から離れ、名詞の物質性に傾いているのだから、すでに大胆なのだった。

空飛ぶ法王てのひらにあるマンホール

の伊訳、

Nel palmo del
Papa volante
un tombino

における動詞の排除は、イタリアで暮らしたパウンドの英語ハイクをいち早く訳してイタリアが学んできたことのひとつである。

ただ、二つの伊訳の前になされた夏石とジム・ケイシャンの

英訳に、新訳はひっぱられてしまう傾向がある（特に詠嘆の読み取り、処理の仕方において）。実際、英訳と離れている場合が、オリジナルな発想でもって最も成功しているのである。

空飛ぶ法王黒猫との距離消滅す

の英訳、

The distance between
the Flying Pope and a black cat
has disappeared

では文字通り距離が「消滅した」（disappeared）が、伊訳、

Colma è la distanza
tra il Papa volante e
un gatto nero

では、これはイタリア語の特性に拠るが、距離は詰められ、「満たされている」（colma）のである。そこには法王の移動により消化された空間が残る。

『空飛ぶ法王』の様々なエディションを前にすると、多言語展開が当初から見据えられ、それに必要な耐性がつけられていったとの印象を受ける。翻訳は増殖し変異するが、オリジナルは屹立している。ちょうど二〇二一年に七〇〇回忌を迎えるダンテ（フィレンツェの詩祭はダンテ一色である）の『神曲』が、世界中の言葉に訳され、日本語にも、この一世紀のあいだに十六回訳された、にもかかわらずオリジナルの存在は揺るがず、ますます大きくなるケースを連想してしまう。

空飛ぶ法王 160 俳句
Flying Pope 160 Haiku
日・伊・英の３言語　　夏石番矢　Ban'ya Natsuishi

Italian translations by Giovanni Borriello
English translations by Ban'ya Natsuishi & Jim Kacian

天の滝より法王落ちて飛び始む

Cadendo da
Una cascata nel cielo
Il Papa volante

Falling from a waterfall
in the sky
the Pope begins to fly

Cyberwit.net ISBN978-93-90601-50-9
US$ 15
https://www.cyberwit.net/publications/1629

口今遊 n.92
2021/10/25